

【本陣等々力家再生・活用事業】 事業に至る背景

■本陣等々力家の概要

■ 本陣等々力家（ほんじん とどろきけ）

江戸時代に松本城主がカモの狩猟や鮭漁に訪れた際の休憩場として利用され、「本陣」と呼ばれました。18c初頭には等々力村を含め計11村をまとめる組手代の役割を担った。現在の屋敷内には主な建物として長屋門、主屋、座敷、裏座敷の他に5棟の蔵が残ります。

■ 市指定文化財「等々力家の長屋門」

屋敷構え北正面の長屋門は切妻造の平屋造で、東西方向に長さは約33m。昭和13年に罹災した際に西端部を約9m撤去したと伝っており、一時期は全長約43mの規模でした。道路側に見える出格子窓は明治時代の造作で、これにより外観から華やかな印象を受けます。昭和54年、旧穂高町が文化財に指定しました（現在市指定文化財）。

■ 屋敷構えの中核と庭園

長屋門をくぐると枯山水の前庭が広がり、さらに進むと主屋、座敷、文庫倉が続きます。主屋と座敷の縁側からは水の流れるある庭園（現在は止水）を望むことができます。この庭園には松や百日紅、市の天然記念物（昭和45年指定）で樹齢400年前後と伝わる幹回り2.93mのビャクシンなどが植えられています。文庫倉は屋敷構えの一番奥の南端に位置し、大切なものを収納する場でした。文庫倉と座敷は趣のある太鼓橋で連結されており、文庫倉を折り返し地点のようにして、裏座敷へと続きます。一個人の住宅で二つの座敷棟を有する例は珍しく、座敷と裏座敷の間の空間は中庭です。裏座敷を除き、これらの長屋門・主屋・座敷・文庫倉の建築年は18c末か19c初期ごろとされ、水の流れる庭園を含めた景観は、本陣等々力家の中核をなし、藩主が来訪した最上層民家の姿を今に伝える重要な資料です。



庭園から見た座敷



長屋門から前庭を望む



主屋（カミオエ）



庭園（主屋から離れへの園路）



前庭（枯山水）

【本陣等々力家再生・活用事業】 事業に至る背景

■事業実施に至る背景

安曇野市を代表する古民家・観光施設から
空き家へ

■ 閉館から空き家へ

有料で一般公開されていたが、ご当主の死去に伴い平成28年頃より空き家となる。

■ 市への相談

荒廃が進み、有形文化財としての存続を危惧した所有者（相続人）から、売却も含め今後について相談を受ける。

■ 安曇野市議会 定例会（令和6年9月）

歴史的・文化的に貴重な古民家である等々力家の存続について、市が政策的に古民家の「保存・再生・活用」の方法を示し、積極的に関わる必要があるのではとの提案を受ける。

再生・活用の検討

■ 検討チームの立ち上げ（令和6年9月～11月）

等々力家の再生・活用について、外部人材も入れた検討チームを立ち上げる。

■ 検討の結果

- ・等々力家は市指定文化財の長屋門だけではなく、建物群や庭を含めて歴史的、文化的な価値は非常に高い
- ・将来に亘って保存・継承していくためには、市が取得して再生・活用を図る必要がある
- ・再生活用には民間活力を前提とし、財源も含めて持続可能な事業提案を民間から広く募集した上で、最終的に取得及び事業化について判断する

■ 方針の決定（令和6年11月）

- ・等々力家を取得し、事業提案を民間事業者から幅広く募集する
- ・そのうえで、活用の方針を決定していく

■ 事業提案の募集（令和7年2月）

事業提案を募り選定委員会を開催した結果、扉ホールディングスを代表とする共同事業体が選ばれる。

事業化に向けた協議

■ 協定締結（令和7年3月）

事業化に向けた詳細協議を進める

■ 国交付金の内示（令和7年9月）

地方創生に関する国交付金「第2世代交付金」の内示を受ける

■ 基本協定の締結（令和7年12月）

事業化の見通しが立ったことから、事業の実施に向けた協定を締結する。

■ 事業手法の決定

官民連携事業としてBTO方式（Build・Transfer・Operate）を採用し、施設の設計・施工・施設運営を事業者に一括発注する事業方式で実施する予定。

■ 施設の運営

- ・市が施設を事業者の有償で貸し付ける
- ・事業者による独立採算事業として実施する
- ・市からの運営委託料の支払いはない